

観音堂 1号墳発掘調査報告書

一般県道上大立大栄線地方特定道路
整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



0050294610

平成 12 年度

倉吉市教育委員会



序

この報告書は、一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事に伴う事前調査として、倉吉市教育委員会が平成11年度に倉吉市上福田字観音堂・八町谷において実施した発掘調査の記録です。

観音堂1号墳は、倉吉市西郊に広がる火山灰台地の久米ヶ原丘陵中腹の南側縁辺部に所在する円墳です。道路工事に係り古墳の墳丘の一部を調査することになりました。幸いにも古墳の主体部等の埋葬施設は保存され、墳丘の部分的な調査でしたが、墳丘を造成した古墳時代の土木技術の高さを示す墳丘断面を確認することができました。

この報告書が多くの方々に活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたりご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所、ならびに地元の方々をはじめ、関係各位に対し心から謝意を表する次第であります。

平成12年10月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

倉吉市教育委員会
氏寄贈

例　　言

1 本報告書は、平成11年度に倉吉市教育委員会が、一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事に伴う事前調査として、鳥取県倉吉市上福田字観音堂・八町谷において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

團　　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員 根鈴 輝雄（倉吉博物館主任学芸員） 森下 哲哉（文化財係主任）

根鈴智津子（文化財係主任） 加藤 誠司（文化財係主事）

岡本 智則（文化財係主事） 関平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 波田野頌二郎（教育次長 9月まで） 景山 敏（教育次長 10月から）

眞田 廣幸（文化課課長） 中井 寿一（文化課課長補佐）

藤井 晃（文化財係係長） 藤井 敬子（文化財係主任）

山崎 昌子（文化財係主事） 金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹歳 晓子・山本 錦・米原 満

3 現場での調査は森下が担当した。遺構の図面整理は森下・松田が担当した。遺物実測は森下が担当した。遺物写真は森下が担当し、松嶋・竹歳・米原が補佐した。浄書は泉・世浪・山本が担当した。

4 本書の執筆は森下が担当した。編集は森下・松田が担当した。

5 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の 1:50,000地形図「倉吉」・「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図（地形図）は、平成9年修正測量の 1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

6 描図中の方位は、特に注記を行わない限り磁北を示す。

7 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

8 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1	遺構	4
2	遺物	6
IV	まとめ	9

報告書抄録

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	観音堂1号墳調査区位置図	4
第3図	調査前・後地形測量図	5
第4図	1号墳遺構図	7
第5図	出土遺物	9

図版目次

図版1	遺跡 調査区遠景 調査区近景
図版2	遺構 墳丘表土除去後 葦石出土状況 基底部石出土状況
図版3	遺構 墳丘表土除去後 葦石出土状況 基底部石出土状況
図版4	遺構 墳丘断ち割り断面
図版5	遺物 出土遺物

I 発掘調査に至る経過

観音堂1号墳の発掘調査は、倉吉市教育委員会文化課が、一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事に伴って実施した古墳の調査である。調査は道路工事により削平される古墳埴丘の一部分だけの調査であった。

平成11年11月、鳥取県中世城館遺跡調査のため倉吉市教育委員会文化課職員が、倉吉市上福田字観音堂、同字八町谷付近を踏査中に、丘陵先端部分でやや大型の円墳を確認し、さらにこの古墳の埴丘上に工事削平予定杭が設置されていることを確認した。このため杭の示す内容を把握するため工事の主管課である鳥取県倉吉土木事務所工務一課へ確認したところ、道路整備工事に伴う法面掘削工事範囲を示す杭であり、古墳の埴丘が一部削平されることが判明した。このため工事主体者である鳥取県倉吉土木事務所工務一課へ古墳の存在を説明し、古墳と工事との調整を行う協議に入った。この結果、工事は平成12年3月に終了予定であり、古墳が存在する丘陵先端部は既に買収済みで、協議時点では法面等の掘削計画の変更や道路計画の変更是不可能な状況であることが示された。このため古墳の保存と工事との調整を図るために、やむを得ず工事によって掘削される古墳埴丘部分200m²について、工事に先立ち事前の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、倉吉市教育委員会文化課が主体となり、鳥取県倉吉土木事務所の委託を受けて平成12年1月5日～平成12年3月22日まで現地調査を実施した。

II 位置と歴史的環境

観音堂1号墳は、倉吉市街地から西方に約7km離れた、倉吉市上福田字観音堂及び字八町谷に所在する観音堂古墳群の丘陵先端に所在する円墳である。そこは通称久米ヶ原丘陵と呼ばれ、大山（標高1711m）の火山活動によって形成された火山灰台地の洪積性丘陵であり、西から東に向かってなだらかな起伏と入り組んだ谷を伴って広がる。観音堂1号墳は、この久米ヶ原丘陵の中腹に位置し、高城小学校西側に派生した南北に延びる小丘陵先端に所在する。丘陵上には1号墳に続き7基の円墳が連続して所在し、8基からなる観音堂古墳群を形成する。

観音堂1号墳が所在する上福田周辺は、天神川の支流国府川と志村川の合流付近に位置し、丘陵上に多くの古墳群が分布する地区である。中でも昭和45年に7基の古墳が調査された履部遺跡（履部古墳群）(43)は、6世紀後半の横穴式石室を有する古墳を中心に約60基の古墳が存在する古墳群として知られている。観音堂古墳群に隣接する観音堂遺跡(77)は、昭和60年に調査された遺跡で、弥生時代後半の集落跡と奈良時代の集落跡が検出されている。さらに同じ久米ヶ原丘陵尾根の高城小学校周辺には、学校背後の丘陵上に円墳7基からなる古墳群が所在し、連続するように稚児ヶ墓古墳群(49)・勝負谷地域遺跡(47)が所在する。また国府川と志村川の合流付近にあたる国府川左岸の福積には並塚古墳群(79)、上福田側に10基前後の円墳からなる古墳群と上福田横穴群(78)が所在する。

観音堂1号墳が所在する倉吉市西郊は、久米ヶ原丘陵を中心に数多くの遺跡が存在する。遺跡は旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く分布する。

弥生時代の遺跡は、前期の遺跡は少ないものの中期になると、福田寺遺跡(70～72)や中尾遺跡、環濠集落の後中尾遺跡(91)が存在する。後期になると急激に集落の増加が認められ、久米ヶ原丘陵でも多くの遺跡が出現し、そのほとんどの遺跡が古墳時代にも連続して営まれ、長期にわたり存続する。遺跡には中期から続く中尾遺跡のほか遠藤谷峯遺跡(56)・中峯遺跡(58)・白市遺跡(57)・履部遺跡・大沢前遺跡(54)・両長谷遺跡(55)や後谷遺跡(93)・箕ヶ平遺跡(92)・小谷遺跡(86)などがある。そして墳墓には、前期のイキス遺跡(33)のほか、向山古墳

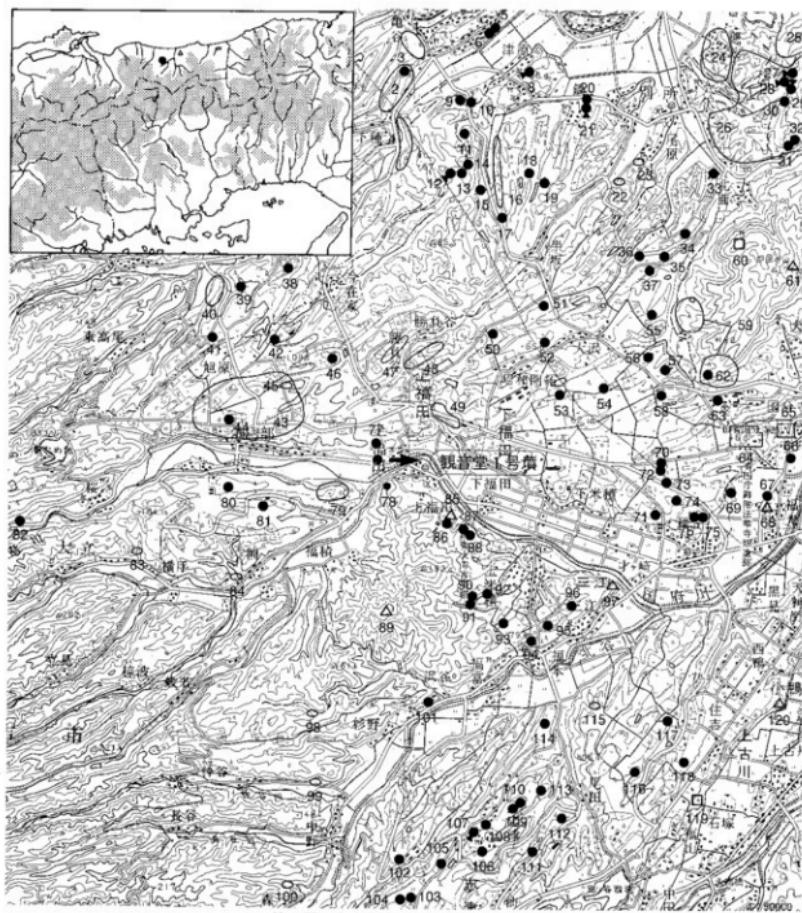
群宮ノ峰支群・国史跡の阿弥大寺墳丘墓群(87)・大谷茶屋の三度舞墳丘墓・大谷後口谷墳丘墓群(62)がある。また土壙墓群では下小垣土壙墓群(88)・二タ子塚遺跡(13)・中峰古墳群が存在する。

古墳時代には、久米ヶ原丘陵に服部遺跡・遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・白市遺跡・大沢前遺跡といった弥生時代後期から続く集落跡とともに、宮ノ下遺跡・擲塚遺跡・大道谷遺跡(53)・矢戸遺跡(75・76)といった新たな集落が営まれるようになり、多くの遺跡の存在が知られている。そして高城山周辺にも、環濠集落が終わった後中尾遺跡や後口谷遺跡・鞆田遺跡(95)が存在する。古墳は、久米ヶ原丘陵東端の国府川左岸に前期の首長墓と考える国分寺古墳や上神大持塚古墳・大谷大持塚古墳が存在する。さらに天神川左岸の向山丘陵東端には向山古墳群宮ノ峰支群が所在して、堅穴式石室を主体部とする宮ノ峰19号墳・20号墳が存在する。5世紀代には、同一丘陵に連続して円墳が築造されたイザ原古墳群や小林古墳群、そして帆立貝式古墳や前方後円墳が計6基群集し墓道の復元ができた沢ベリ遺跡2次がある。沢ベリ遺跡5号墳と7号墳の周溝内からは鹿皮模様の斑点を施した人物埴輪が出土した。後期古墳では久米ヶ原丘陵をはじめ、蜘蛛ヶ山南麓の上神地区周辺や四王寺山周辺の大谷地区、そして向山丘陵を中心に数多くの円墳を中心とする古墳群が存在する。これらの古墳の多くは直径10~20m程度の小規模な円墳からなり、そのほとんどが後期の古墳群である。このうち埴輪を伴う古墳は、形象埴輪では家ノ上1号墳や沢ベリ古墳群の5号墳・7号墳・8号墳・9号墳があり、上神の西山古墳群の2号墳や8号墳、向山142号墳から家・人物・馬・鹿・鶏などが出土した。円筒埴輪が出土した古墳は、高鼻2号墳(21)、大平1号墳、大山1号墳・2号墳(19)、小林1号墳、芸才寺1号墳、服部47号墳などが知られている。さらに倉吉地方中心に出土する埴形埴輪は、向山309号墳をはじめ柴栗2号墳、家ノ上1号墳(105)など倉吉市から岡山県北部にいたる範囲で20基の古墳から出土しており、南は岡山県の四つ塚13号墳の出土が知られている。

奈良時代になると、この久米ヶ原丘陵の東端周辺に国指定史跡の伯耆国府が所在し、伯耆国衙(64)や法華寺畠遺跡、不入岡遺跡などの官衙跡が存在し、近接して伯耆国分寺(65)が設けられるなど、伯耆国の政治・経済・文化の中心地となる。この中で一番東側に位置する不入岡遺跡は、国府川沿いに東西に長い大型掘立柱建物が並列する倉庫群を有し、伯耆国の物資収納施設と考えられている。

平安時代になると、久米ヶ原丘陵の谷を隔てた北側の四王寺山山頂に、四天王像を祀る四王寺(60)が建立された。鎌倉時代から室町時代にかけての遺跡は城跡以外あまり知られていないが、集落跡として14~15世紀代に當まれた福光に所在する今倉遺跡(67)が確認されている。

1 龜谷古墳群	16 頭根後谷遺跡	31 上神119号墳	46 鶴塚古墳群	61 大谷城跡
2 龜谷遺跡群	17 東鳥ヶ尾古墳	32 クズマ遺跡1次	47 勝負谷地城遺跡	62 大谷後口谷墳丘墓
3 龜谷第1遺跡	18 大仙峯遺跡	33 イキス遺跡	48 ケンカ冢古墳群	63 向野遺跡
4 下種東古墳群	19 大山遺跡	34 取木遺跡	49 稚兒ヶ墓古墳群	64 伯耆国衙跡
5 東亀谷1号墳	20 高鼻1号墳	35 一反半田遺跡	50 昭和開拓遺跡	65 伯耆国分寺跡
6 東亀谷2号墳	21 高鼻2号墳	36 コサンコウ遺跡	51 矢内谷跡	66 河原毛田遺跡
7 島遺跡群	22 鉄山平たら	37 道祖神峰遺跡	52 高峰遺跡	67 今倉遺跡
8 大塚山古墳	23 伯尾山窪跡	38 賀茂山古墳	53 大道谷遺跡	68 今倉城跡
9 西院ス古墳群	24 種被古墳群	39 東峯遺跡	54 大沢前遺跡	69 岬ノ掛遺跡
10 清水谷尻1号墳	25 曲古墳群	40 上種東古墳群	55 児長谷遺跡	70 福田寺遺跡1次
11 清水谷古墳群	26 上神古墳群	41 下野山古墳	56 遠藤谷峯遺跡	71 福田寺遺跡2次
12 二タ子塚6号墳	27 上神44号墳	42 別塚遺跡	57 白市遺跡	72 福田寺遺跡3次
13 二タ子塚遺跡	28 上神45号墳	43 服部遺跡群	58 中峯遺跡	73 東福寺遺跡
14 駄道東遺跡	29 上神48号墳	44 服部11号墳	59 古墳群	74 岩屋遺跡
15 郊家平古墳群	30 上神51号墳	45 テツツァンたら	60 四王寺跡	75 矢戸遺跡1次



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 76 矢戸遺跡 2次 | 85 下福田城跡 | 94 福本家ノ上古墓 | 103 野口遺跡A地区 | 112 尾田中峰遺跡 |
| 77 銀杏堂遺跡 | 86 小谷遺跡 | 95 晩田遺跡 | 104 野口遺跡B地区 | 113 小鶴物跡遺跡 |
| 78 上福田横穴群 | 87 阿弥寺大塚丘墓群 | 96 上野遺跡 | 105 家ノ上遺跡 | 114 津田峰遺跡 |
| 79 並塚古墳群 | 88 下小垣遺跡 | 97 三江城跡 | 106 宮ノ前遺跡 | 115 菅ヶ谷口たら |
| 80 牛王野北古墳群 | 89 高城城跡 | 98 下金糞たたら | 107 塚ノ山古墳 | 116 八ツ塚古墳群 |
| 81 牛王野遺跡 | 90 奥田遺跡 | 99 大熊田たたら | 108 荒神畠遺跡 | 117 後口野1号墳 |
| 82 大日寺遺跡群 | 91 後中尾遺跡 | 100 安歩畠治澤掘跡 | 109 大平遺跡A地区 | 118 野畠古墳群 |
| 83 横谷たたら | 92 箕ヶ平遺跡 | 101 屋敷通掘跡 | 110 大平遺跡B地区 | 119 石塚庵寺 |
| 84 牧谷たたら | 93 後口谷遺跡 | 102 志津向野遺跡 | 111 尾田二子塚遺跡 | 120 市場城跡 |

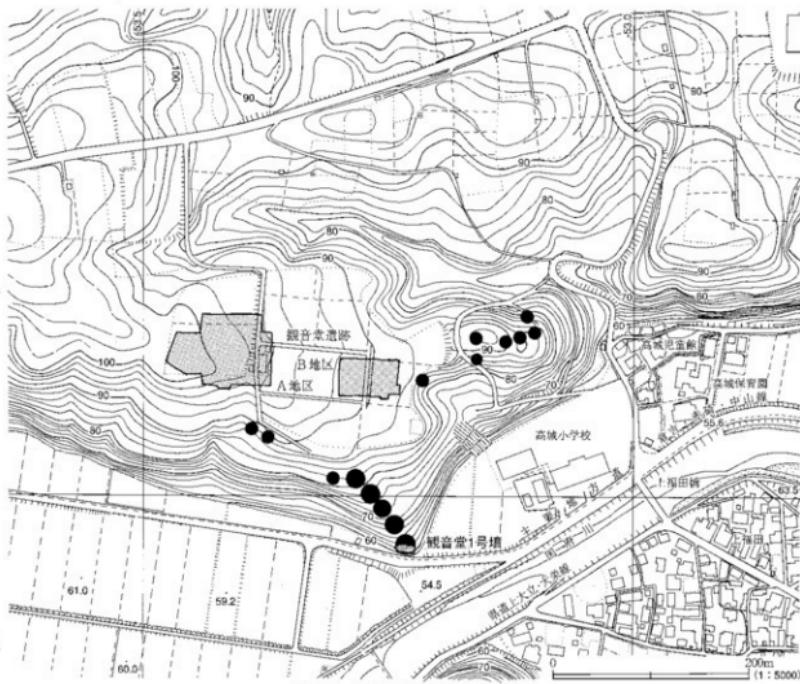
III 調査の概要

発掘調査は、一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事に伴う事前調査として、工事によって削られる古墳の南側約1/3を調査した。発掘調査面積は200m²であった。調査は、削平部分を含む墳丘全体および周辺地形の平板測量を行い地形図を作成した後、墳丘の南側調査区を東西の区画に分け、南北の土層観察用のベルトを設定した。調査は区画ごとに墳丘表土を除去し遺構の確認を行うことから始めた。

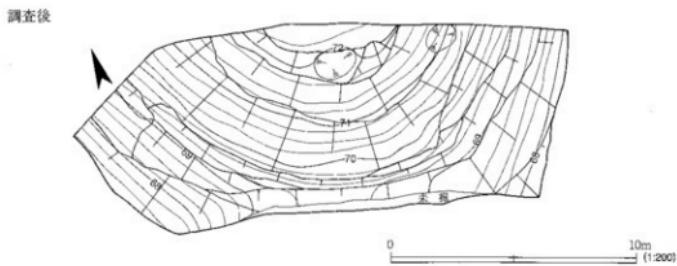
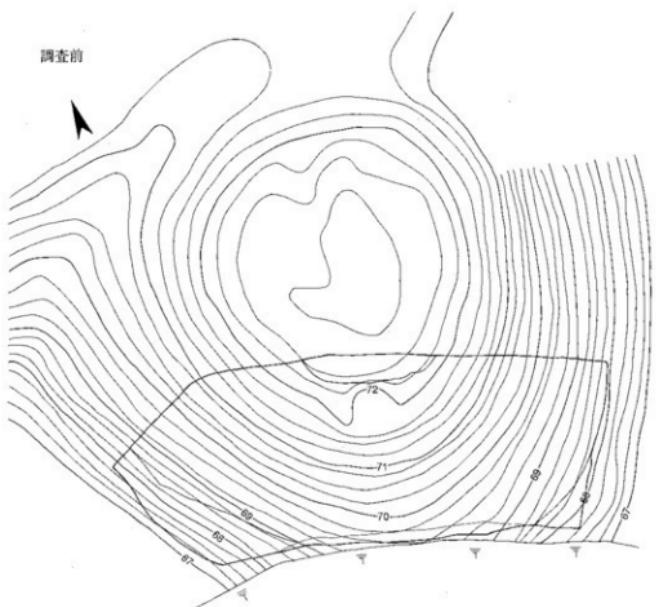
この結果、表土下で墳丘を覆う葺石の一部分を検出した。古墳の主体部を含む埋葬施設や周溝などの主要施設は検出しなかった。出土遺物は非常に少なく、墳丘頂部付近の墳丘から円筒埴輪片と旧表土の黒色土中から弥生土器片と縄文土器片を出土しただけであった。調査は、削られる部分での墳丘断ち割りを行い、墳丘盛土の土層観察を行って終了した。

1 遺構

墳丘 久米ヶ原丘陵の中央部から南東に派生した小丘陵が県道上大立大栄線と接する先端部、標高71m付近に所在する円墳である。1号墳から南側は以前の道路工事により既に削平された法面で、旧地形の状況は不明である。周溝を挟んで北西側に観音堂2号墳が位置する。調査は墳丘の南側8mだけであったが、調査前の地形測量から、



第2図 観音堂1号墳調査区位置図



第3図 調査前・後地形測量図

墳頂に東西約8m×南北約9mの平坦面を有し、直径約20m、高さは古墳北側の現状の周溝底から1.8mを測る。

墳丘は丘陵の地形をそのまま利用してつくりられており、旧表土の上に盛土を行っている。東西方向での断ち割り状況でみると、旧表土上面の丘陵裾部分に暗茶褐色土の盛土を行って水平面をつくり、この上に人頭大の石材を敷き墳丘盛土の基底部としている。もともと岩石を多く含んでいる地山であるため、平面的には人工的に並べた石材と自然の岩石が重なりあって一面に石を敷いた状況に見えるが、断面に見えるように墳丘基底部の石材は旧地表上面に一列にならぶ。墳丘は、この基底部上面の平坦部分の端に模状に盛り上げた断面三角形の第8・9層の黒茶褐色土や茶褐色土、第26・27層の褐色ブロック土や暗褐色ブロック土を最初に盛土し、墳丘中央の盛土

を行う。そして墳丘北側の周溝を掘り下げた際の、地山崩壊土の岩石を多く含む明褐色ブロック土で墳丘全体を盛土したと思われる。古墳を形成している基底部上面の石材には、非常に大きな岩石が部分的に使われており、墳丘盛土の土留めの役割を持たせたものと考えられる。

墳丘上面の葺石は、石材の統一がなされておらず人頭大から拳大まであり、規格性にとんだものとは考えられない。また葺石にも、標高70m付近と標高68m付近に大きな河原石を使用しており、墳丘盛土の土留めの石材と考えることができた。

旧表土以下は、黒色土・褐色粘質土・ホーキブロック土と続き、第32層のホーキブロック土には非常に多くの岩石を含んでいた。

周溝 周溝は墳丘の北側の調査区外にあって、掘り下げ等の調査は行わなかったが、丘陵の切り離し状の周溝で半周すると思われる。地形測量によると周溝の幅は約6mを測る。周溝内埋葬等の状況は未確認である。

2 遺物

今回の調査では、古墳に伴う遺物としては円筒埴輪片が出土し、そのほかに墳丘下遺物として弥生土器片と縄文土器片が出土した。円筒埴輪は、墳頂部に近い墳丘斜面から埴輪基底部が出土しており、埴輪の樹立部分の残存状況と思われるが、明確な位置などは不明である。出土した埴輪はいずれも部分的な小破片であり1個体を復元できるものはなかったが、出土部位と出土個体数から3~5個体分の埴輪片と考える。このうち図化できたものは口縁部2点と体部1点、基底部3点の計6点であった。

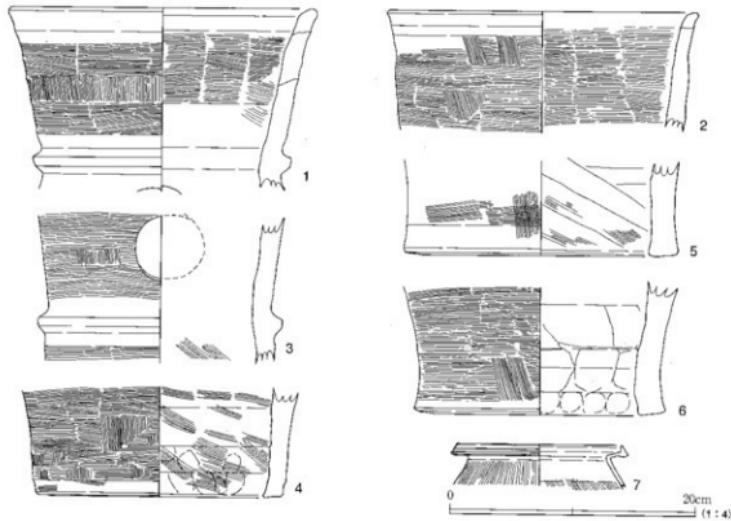
円筒埴輪（1~6） 2条の突帯により3段に区画される小型の円筒埴輪である。突帯によって区画された中段に円形の透し孔を穿孔する。口縁部分の形状は、端部がやや外傾気味に聞くもの（1）と、薄手で緩やかに外傾するもの（2）の2種類があり、基底部ではその形状や器厚から3種類のものがみられる。中段の透し孔部分は図化できたものは1点（3）だけであるが、破片は何点か出土し、いずれも円形の透し孔を有する。体部の手法は、大部分が丁寧で単位の細かなハケメ調整を施す。ほとんどが縦方向のハケメ調整をした後に横方向のハケメ調整をする。内面は大部分がナデ調整とハケメ調整が施される。基底部は、ハケメ調整が中心で指押さえとナデ調整が施される。赤色顔料による外面塗装は施されない。色調はいずれも淡褐色で、焼成は普通である。口径は1・2が24.4cm・25.0cm、胴部径は3が21.0cm、基底部径は4~6が19.6cm・21.8cm・19.6cmである。

弥生土器壺（7） わずかに肩の張る砲弾形の体部に「く」字状の口縁部を有する。口縁端部は上下に拡張され、端部外面に2条の凹線を施す。口縁部内外面ヨコナデ調整し、外面縁部以下縦方向のハケ目調整を施す。口径13.4cm。

縄文土器（8・9、図版5） 縄文時代早期の山形の押型文土器（8）と、縄文時代中期のキャリバー状の深鉢（9）で船元1式に相当する土器が出土している。



第4図 1号填埋構図



第5図 出土遺物

IVまとめ

観音堂1号墳の発掘調査は、道路工事法面にかかる古墳墳丘の一部を調査した部分的な調査であり、古墳の主体部や埋葬施設、あるいは古墳の周溝などは調査区外となり保存されることとなった。調査は古墳の墳丘約1/3の部分的な調査であり、古墳の主要遺構は検出しなかったが、調査で明らかになったことを整理しまとめとする。

墳丘と周溝 墳丘先端部分に所在する直径約20m、高さ（現存高）1.8mの円墳である。墳丘の北側、丘陵の高い側に丘陵切り離しの周溝が半周すると思われる。調査が部分的であったため調査後の墳丘規模等は未確認である。

墳丘は、丘陵の地形をそのまま利用して築造される。丘陵の高い側を削り、この土を低い側に盛土することにより墳丘とする。盛土を行う際、旧地表面を水平にし墳丘の基底部としている。この基底部の平らな面には、人工的に大小の石材を並べ、墳丘端にも土留めの石材を置く。これを基底部として墳丘を水平に盛土する。墳丘面には岩石や川原石の葺石を施す。主体部等の埋葬施設は未確認であるが、墳丘断ち割りの断面に掘り方の一部と思われる層位が認められた。

時期 古墳の築造年代については、古墳に伴う主体部や埋葬施設、古墳周溝が未調査であり、また古墳に伴う遺物が墳丘上面で出土した円筒埴輪片だけであり時期決定の決め手を欠く。しかし、墳丘上面から出土した少量の円筒埴輪は、古墳時代後期の小型化した円筒埴輪であった。この円筒埴輪は、基本的に2条のタガとタガ間に円形の透し孔を配するものであり、等間隔にタガを配し外面をきめ細かなハケメ調整し、内面をハケメ調整とナデ

調整するものであった。ハケメ調整は、縦方向の後横方向のハケメ調整を施す。そして赤色顔料による塗彩を施さないのが特徴であった。こうした特徴は、倉吉市大谷の小林2号墳や倉吉市服部の服部47号墳出土の円筒埴輪に類似するものである。これらの埴輪は5世紀末から6世紀前半に位置づけられており、このことから観音堂1号墳出土の円筒埴輪の時期はおおむね6世紀前半と考えられ、古墳築造年代も6世紀前半に位置づけられるものと推定する。

以上、部分的な調査であった観音堂1号墳については、その性格を調べる上で非常に困難なものがあった。今後、本古墳の保存された部分に存在する主体部や古墳の背後に連続する観音堂古墳群の調査が進展すれば、築造年代や古墳の性格が明らかにされるものと考え、古墳の詳細は次に委ねたい。

参考文献

- 根鉢輝雄 「イザ源古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1983
箕田廣幸 「高鼻2号墳（灘手2号墳）発掘調査報告」 倉吉市教育委員会 1983
岡平拓也 「クズマ遺跡第2次発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1999
竹宮亜也子・岡本智則 「不入岡遺跡群発掘調査報告書－不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査－」 倉吉市教育委員会 1996
竹宮亜也子 「葬送具からみた社会」『新編倉吉市史』第1巻 1996



△調査区遠景（南西から）

▽調査区近景（西から）

図版 2



墳丘 表土除去後

(北から)



葺石出土状況

(北から)



基底部石出土状況

(北から)

図版 3

墳丘 表土除去後

(東から)



葺石出土状況

(東から)



基底部石出土状況

(東から)



図版 4



墳丘断ち割り断面西側

(西から)



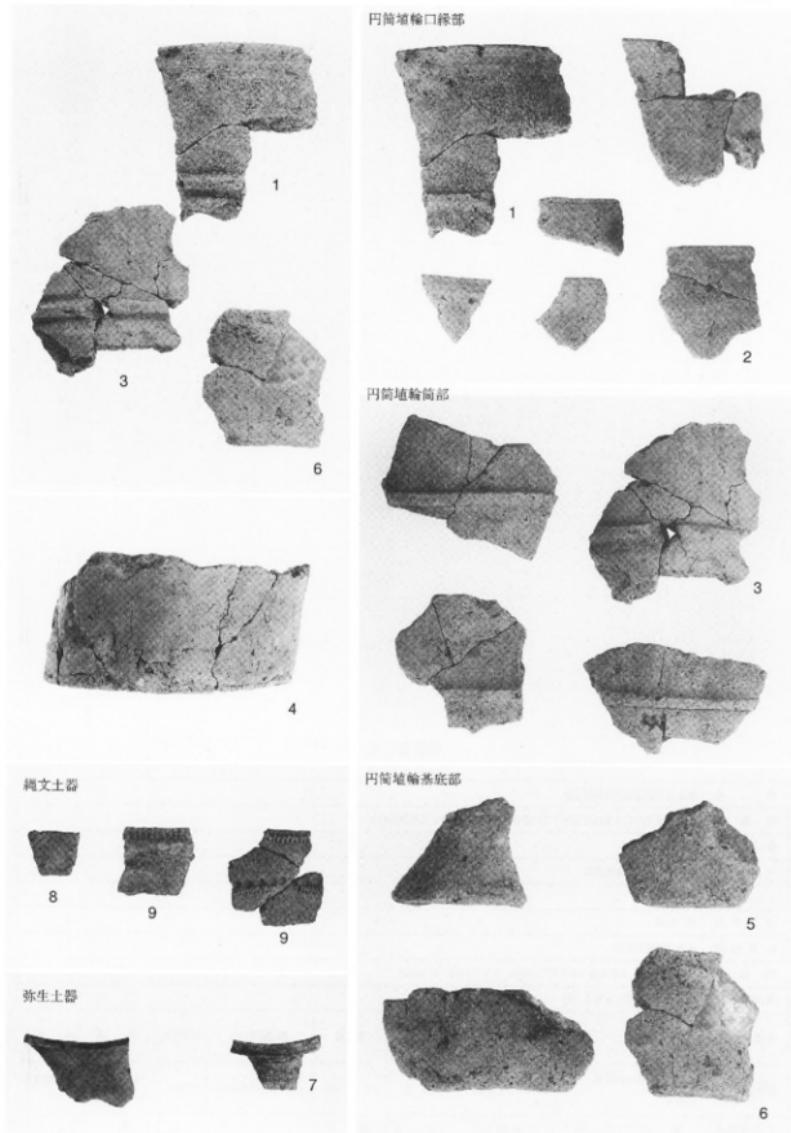
墳丘中央

(南から)



東側

(南から)



210.2
Kur
(109)

図書館

報告書抄録

書名	鏡音堂1号墳発掘調査報告書						
副書名	一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事に伴う推進文化財免強調度						
巻次	一						
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第109集						
編著者名	高下哲哉						
編集機関	倉吉市教育委員会						
所在地	〒682-8611 鳥取県倉吉市萬町722番地 TEL 0858-22-4419						
施行年月日	西暦2000年10月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
鏡音堂1号墳		市町村：連絡記号					
鏡音堂1号墳	倉吉市上福田字鏡音堂・八幡谷	31203:4 EKK	35° 25' 33"	135° 44' 48"	2000/05~2000/05	200m ²	一般県道上大立大栄線地方特定道路整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項			
鏡音堂1号墳	古墳	古墳：古墳 1基	円筒埴輪・弥生土器・礪文土器	6世紀前半に造られた直径20mの円墳。			

観音堂1号墳発掘調査報告書

平成12年10月31日 印刷

平成12年10月31日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会
印刷 製本 (有)優成印刷